

論文審査の結果の要旨

申請者氏名 ありあ びぶらじはん らや  
Alia Bihrajihant Raya

インドネシアにおいては、1960年代以来、農村開発政策の一環として農民グループ(FG)の奨励策がとられてきた。しかし、それらの活動は活発とはいえない。この論文では、ジョグジャカルタ特別地区の隣接した2つの村においてそれぞれ1980年代に設立されたFG (Bugul FG/Garongan FG) に注目して、それらの歴史的な発展過程および現状における特徴を析出した。この2つのFGは、ともに、グループとしての集団的行為を通じてトウガラシの生産と販売に成功した先進的な事例としてよく知られている。両グループのこうした共通性にもかかわらず、組織的な特性に関しては対照的な特徴を有している。この論文では、4つの側面からそれらの対称性を明らかにした。

第1に、歴史的な発展過程に関して。Bugul村とGarongan村はともに海岸の砂地地帯に位置しており、1980年代まで不毛な地域であった。ただしBugul村では、わずかながら存在した水田からの所得を原資に子弟への教育投資がなされ、その結果、兼業農家比率が相対的に高かった。1980年代に、兼業農家のなかから砂地でのトウガラシ栽培を試みるものが現れた。井戸掘りやビニールによる被膜などの新技術を外部から取り込むことによってトウガラシ栽培を定着・拡大させることに成功した。この人物がBugul FGを設立し、リーダーとしてグループを率いた。Garongan村農民は、隣村の新技術を導入して、トウガラシ栽培をはじめた。Garongan村農民は、トウガラシを個別に商人に販売していたが、単価が相手や時期によって大きく異なることに同じ村民として不便を感じていた。そこで、Garongan FGが主催するセリをつうじて共同販売する方式を考案した。この共同販売方式は、Bugul FGにも採用された。初期条件のわずかな違いが2つの村の就業構造の違いとなって現われ、その条件がそれぞれのFGのイノベーション(技術/制度)の在り方を規定していったことが明らかになった。

第2に、組合員相互のネットワークの構造について。Bugul FG組合員は、兼業率が高いために日常的に組合活動に関わるのが難しい。共同販売の際にリーダーと接触するのが情報共有の最大の機会である。そのために、組合員相互のネットワークは、リーダーと組合員との放射線状の構造を呈している。Garongan FGの場合、兼業率が低く伝統的な共同作業慣行も存続しているために、組合員相互の関係が濃密である。組合員のネットワークは、村落(RT)を範囲とする水平的なそれによって補完された分権的な構造を有している点が特徴的である。2つの村の社会経済構造の差異が、FGのネットワーク構造の違いとなって反映していることが確認できた。

第3に、トウガラシの栽培技術と共同販売に関する各組合員の成績について。Bugul FGにおいては、商人前貸しによって生産財(種子・肥料・ビニール)の購入が可能であるために、組合員の経済力には影響されない。これら生産財の導入は、むしろFGリーダーと

の関係の近さに規定されている。Garongan FG では、ネットワークが濃密であるために FG リーダーとの距離の規定性は弱い。前貸しをする商人が不在のため、組合員個人の経済力に影響される傾向が強い。共同販売に関しては、Bugul FG においては、商人から前借りした組合員は、返済のために当該商人にトウガラシを販売することから、共同販売比率が小さい。Garongan FG では、最低共同販売比率（80%）を定めており、それが規範化している。ただし、共同販売の場合に現金化に日数がかかるために、キャッシュフローに余裕のある大規模農家ほど共同販売比率が高い傾向にある。2 つの FG の組合員の経済的条件とネットワーク上の特徴が、個別組合員の成績にそれぞれ異なるかたちで影響を及ぼしていることが析出された。

第4に、リーダーシップの機能に関して。Bugul FG においては、定期的なグループ会議は開催されておらず、その結果、FG の活動において、情報の発信源としてのリーダー個人の資質が重要な役割を果たしている。Garongan FG では、定期的なグループ会議が開かれかつ組合員相互のネットワークが濃厚であるために、リーダーの資質よりも、グループ内でのコンセンサスがグループの活動において重要である。2 つの FG の組織上の特性がリーダーシップの異なる機能として反映していることが確認された。

これらの論証をふまえて、最後に、それぞれの地域の社会経済的・歴史的条件を踏まえながら FG を組織化してゆくことの必要性を唱えて、政策的含意を示した。

以上、この論文では、インドネシア・ジョグジャカルタ特別地区の砂地地帯における 2 つの農民グループ (FG) を取り上げて、組合員からの聞き取り調査をもとにして、1980 年代以降の展開過程および現段階における組織的特性とリーダーシップの役割に関する分析を行った。この分析成果は、学術上、応用上資するところが少なくない。よって審査委員一同は、本論文が博士（農学）の学位論文として価値あるものと認めた。